

文献案内

茶道資料館編『北野大茶湯―天正から現代へ―』（令和二年秋季特別展図録、同館、二〇二〇年一〇月六日）

豊臣秀吉が天正一五（一五八七）年に催した北野大茶湯（以下、大茶湯）について、その基礎史料と研究状況を理解することができる。秀吉伝の一齣として著名だが、一次資料の少ないことは案外知られていない。イメージの源泉となってきた浮田一蕙筆「北野大茶湯図」も、開催より二五〇余年を経て描かれた想像図である。本図録は、この一図を核とした四章構成で、①文字史料から大茶湯像を整理し、②一蕙は何を根拠にどの様に描いたのかを追う。また、③早くから語り継がれる存在となった大茶湯の周辺史料を紹介し、④その伝統に拠りながら、新たな形として動き出した明治以降の献茶式を紹介する。総括として、標題の論考（執筆木下明日香）と作品解説を収める。特に④は茶道家との関わりとして同館の特色が打ち出され、一蕙画を念頭として新たな記録画が生産される様も理解することが出来る。

本企画では大茶湯を正面に据えるが、催された場である北野社側から見ても、大茶湯研究の重要性に気づかされる。大茶湯の開催を知らせたとされる北野社伝来の「高札」は、実は江戸時代の物であり、時代を降っても同社では形あるものとして必要とされてきた。献茶式の再興においては、北野宮司が深く関わっていたこと、一蕙画をはじめとする様々な文物が同社に奉納されてきたことが紹介される。一日限りの秀吉の催しを後世の北野社はどのように捉え、その伝説化にいかに関わってきたのか、興味深い論点となる。

大茶湯の同時代史料は限られ、後代の編纂物における記載との異同・問題点は整理して示されているので、新出史料がなければ、これ以上の実態還元は進まないと思われる。最後に一つ可能性を探るならば、やはり北野社側からの照射であろう。同社を描く屏風絵は多いが、なかには文献史料との齟齬も見受けられる。そうした点を手掛かりに、指図や年中行事の次第書等に記された建物の配置や儀式の導線を洗い直すことは、境内に建ち並べられた茶屋想定に有効であり、北野社で育まれた諸芸能の基礎研究に資するものとなる。

（三島暁子）

満田さおり「紫宸殿御帳台の継壇に関する復元的研究―即位関連儀式の玉座にみる平安復古の理想とその実現―」（『宮内庁京都事務所年報』一、宮内庁京都事務所、二〇二〇年三月）

明治天皇即位式で高御座代に用いられたとされる御帳台の継壇（基壇）について、解体されて京都御所内に保管中の部材の確認調査と再組立てを行い、墨書や転用の痕跡からその前身の姿を復元している。検討対象となるのは、今次の即位の礼に用いられた大正度新造の高御座・御帳台とは別物である。明治即位式の際には高御座は焼失しており、紫宸殿常置の御帳台を用い、聖徳記念絵画館などの歴史画も実際を踏まえて描かれている。

保管されていた木材は主に外部から見える部材で、床下の束など内部の部材は現存せず、また飾金具一色も保管されるといふ。蹴込板（格狭間）の鳳凰・麒麟の彩色図様は、木地に直接ではなく、紙に描いて貼る。墨書・柄穴を手がかりに組立て、東西約五・六×南北約五・一×床高一メートル、北側にのみ階段があり、四方に高欄が取り付く基壇となった。しかしこれは転用後の姿で、さらに規模の大きな構造物であった痕跡も多数確認された。

転用前の姿については絵画史料が手がかりとなる。大嘗会の辰巳日節会では、紫宸殿内の高御座の東西に悠紀・主基両国御帳を置くため、高御座の基壇の左右に壇を継ぎ足した。嘉永七年（一八五四）大火の被害を勘案すると、現存するのは孝明天皇（同元年）の大嘗会で使用後に保管されていた継壇の一部で、継壇の全体は幅一七・五メートルと巨大なものに復元される。

天明七年（一七八七）光格天皇の大嘗会にて両国御帳の継壇は新造されたが、それに対して紫宸殿が狭く、寛政度内裏での「旧制」復古へと結びついた。しかし既存継壇をそのまま用いると紫宸殿の柱との関係に不具合が生じ、嘉永度の継壇新造では仕様に反映されたことが指図から推測できる。

本号では京都御所や離宮の概要に加え、事業報告として建物・庭園の修理・整備に関して図面・写真とともに記録し、類似事例での参考になり、環境変化や公開活用とのバランスなど、今後の基礎的資料となるだろう。

（藤原重雄）